5/10 小幡ゼミ
担当：月岡

第四章第二節 一般的定式の諸矛盾

〇商品流通の形態

・W-G-W を G-W-G として順序を逆転させるだけでは単純な商品流通の部面を超えたことにはならない

←A：W-G-W　私：G-W-G　B：W-G-W　この場合、私は単に媒介しているにすぎず、A と B が直接互いに交換するのと同じことになるため

〇商品交換としての流通形態

・抽象的に W-G-W を考察すると、２者間での W-G-W としての交換は使用価値の面で両者が得をすると言える。商品の単なる形態変換のほかにはなにも起らない。

・商品交換は、その純粋な姿態においては、等価物どうしの交換であり、したがって価値を増やす手段ではない

＝自分が流通に投じるよりも多くの価値を流通から引き出しはしない。剰余価値の形成は行われない

〇不等価交換と流通形態

・諸商品の全般的な名目的価格引き上げは、結局のところ互いに高く売りあう結果となり、価値通りに売ったのとまったく同じということになる。したがって価値関係は不変のまま。

⇒剰余価値の形成＝貨幣の資本への転化は、商品が価値以上或いは価値以下で売られることによっては説明され得ない

従って、資本の大洪水以前の姿態である商業資本は、買う商品生産者と得る商品生産者の間に寄生的に割り込み、両生産者からだましとることから導き出すほかない。（利子生み資本も同様）

→従って、資本が近代社会の経済組織を規定するさいにとる形態をわれわれが分析するにあたって、資本の大洪水以前の姿態は考慮しない。

〇流通の内部と外部

・剰余価値は流通からは生じえないため、その形成は流通そのもののなかでは目に見えないなにごとかが、流通の背後でおこっている、というわけでもない。

・流通は商品所有者たちのいっさいの相互関連の総和である

→流通の外部では、商品所有者は自分自身の商品と関連するだけ

→商品所有者が労働量を付け加えることで商品の価値は増えるが、剰余価値が生み出された訳ではない

⇒流通の内部でも、また外部においても剰余価値は発生しない

・ここでの問題：貨幣の資本への転化は、流通部面のなかで行われなければならず、しかも流通部面のなかで行われてはならない

第四章第三節 労働力の購買と販売

〇価値の変化

・第二の流通行為である商品の再販売 W-G からは、価値の変化は生じえない

←この行為は商品を自然形態から貨幣形態に再転化させるだけであるため

⇒したがって、この変化は第一の行為 G-W で買われる商品のうちに起こるが、等価物同士が交換されるのであるから、商品の価値のうえに起こるのではない。商品の使用価値そのもの＝商品の消費から生じる。

・その為には、それの使用価値そのものが価値の源泉であるとい独自な性質をもっている一商品を、したがってそれの現実的消費そのものが労働の対象化であり、それゆえ価値創造である一商品、すなわち労働能力または労働力が流通部面の内部＝市場において見いだされなければならない。

・労働能力または労働力とは、人間の肉体、生きた人格性のうちに実存していて、彼がなんらかの種類の使用価値を生産するそのたびごとに運動させる、肉体的および精神的諸能力の総体のこと

〇商品としての労働力が市場で見出される条件

①労働力の所有者は自身の労働力を商品として得る為には、労働力を自由に処分することができなければならず、したがって自分の人格の自由な所有者でなければならない。また、一定の期間だけに限って労働力を譲渡してもそれにたいする自分の所有権は放棄しない。

→貨幣所有者と労働力の所有者は、法律上では平等な人格

②労働力の所有者が、自分の労働の対象化された商品を得ることができないで、自分の労働力そのものを商品として得るに出さなければならない。

→2 重の意味での自由な労働者

・貨幣または商品の所有者と単なる労働力の所有者という関係は、自然史的関係ではないし、歴史上のあらゆる時代に共通な社会的関係でもない。先行の歴史的発展の結果であり、幾多の経済的変革の産物、社会的生産の全一連の古い諸構成体の没落の産物である

〇諸経済的カテゴリー

・商品

→商品になるためには、生産物は、生産者自身のための直接的な生活維持手段として生産されてはならない。とはいえ、生産物量の圧倒的大部分が直接に自家需要に向けられていて商品に転化していなくても、したがって社会的生産過程がその全体的な広さと深さの点でまだまだ交換価値に支配されているというにはほど遠くても、商品生産および商品流通は生じうる。商品としての生産物の出現は、社会内分業が十分に発展して、直接的交換取引においてはじめて始まる使用価値と交換価値との分離がすでに完成されていることを条件とするが、このような発展段階は、歴史的にははなはだしく異なる経済的社会諸構成体に共通のもの。

・p182
「労働市場を商品市場の特殊な一部門として見いだす貨幣所有者」
マルクスは、労働市場を正面から分析の俎上に取り上げているとはいえないのではないか
であるとすればその理由は何か
・労働力に価値があるとすれば、労働力市場における賃金の決定は如何にして行われると考えれば良いのか。需給関係によって決まると考えるのか否か。

・貨幣
→貨幣は商品交換の一定の発展程度を前提するが、商品流通の比較的わずかな発展で十分。
・資本
→資本の歴史的な実存諸条件は、~~粗油~~商品流通および貨幣流通とともに定在するものでは決してない

○労働力の価値規定
・労働力の価値は、他のどの商品の価値とも同じく、この独特な物品の生産に、したがってまた再生産に必要な労働時間によって規定されている
・労働力の生産とは、個人の再生産または維持のことである。自分を維持するためには、生きた個人は、一定量の生活諸手段を必要とする
・労働力の生産に必要な労働時間は、この生活諸手段の生産に必要な労働時間に帰着する（労働力の価値は流通に入る前に規定される）
・生活諸手段の総量（食物、衣服、暖房、住居など自然的欲求）は、……必需欲求の範囲は、それ自身一つの歴史的産物であり、それゆえ、多くは一国の文化段階に依存する
⇒労働力の価値規定は、他の商品の場合とは対照的に、歴史的かつ社会慣行的な一要素を含んでいる。とはいえ、一定の国、一定の時代については、必要生活諸手段の平均範囲は与えられている
・労働力の生産に必要な生活手段の総額は、労働者の子供たちの生活諸手段を含む
・特定の労働部門における技能と熟練を身につけるための修業費も労働力の生産のために支出される価値の枠のなかにはいっていく
→・労働力の価値はまた、この生活諸手段の価値＝その生産に必要な労働時間の大きさとともに変動する
○労働力の独自な本性
・買い手と売り手のあいだに契約が結ばれても労働力の使用価値はまだ現実に書いての手に移行していない。労働力の譲渡と力の現実の発揮とは時間的に離れている。
・労働力は、売買契約で確定された起源のあいだ機能し終えたあとで、はじめて支払いをうける

○労働力の消費
・労働力の消費過程は、同時に商品の生産過程であり剰余価値の生産過程である

疑問
・この章では、労働力の生産手段からの分離を所与のものとして労働力を与えているのが、なぜ本源的蓄積を後に回すという形で論証しているのか。